

月刊 地域支え合い情報

[2018年8月20日発行]

本体 286円 + 税

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



大勢が個人宅に集まり、笑顔がはじける（すみれ会／詳しくは5頁へ）

特集 わたしの家を みんなの集い場に

- 荒浜出身者と地域皆の憩いのサロンを、
新しく生まれたまちで ③
ちよっとお茶っこサロン（宮城県仙台市若林区）
- 集会所が使えなくても寄り合える ⑤
すみれ会（宮城県南三陸町）
- 地域は家族、新しい大家族のカタチ ⑦
友の会（宮城県美里町）

まじわる災害公営住宅⑧ ⑨
南中里一丁目復興住宅あすなろ会（宮城県石巻市）

住民が支え合う生活支援⑤ ⑩
結いの会・高森東（宮城県仙台市泉区）

つくる・稼ぐ・元気になる② ⑪
マタギ倶楽部（岩手県大槌町）

どこでもサロン⑬ ⑫
燈伝山松前寺（福島県金山町）
なかよしピンポンクラブ（宮城県石巻市）

被災経験地からのメッセージ⑭
川根復興協議会（広島県安芸高田市）

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ⑮

東北の元気⑳ ⑯
タイムスリップと仲間たち（宮城県石巻市）

☆専門家に聞く地域づくりのヒント
（東海大学 健康学部 助教 竹内 友章さん）

わたしの家を

みんなの集い場に

ご近所の人と、道端であいさつを交わす。
家の玄関先で立ち話をする。
居間で一緒にお茶を飲む。



それらを些細なやりとり、日常的なことだと思えば、
苦手なもの、難しいものを感じる人もいます。

今回の特集で紹介するのは、
ご近所同士などで親睦を深めるために定期的に個人宅に集まり、
お茶飲みや食事などを行っている3組。

人を招くことで、自宅でにぎやかな時間を送ることができたり、
招かれた先で、堅苦しくなく、ゆったりくつろいで過ごせたり。

そして、個人の生活空間で時間をともにし、
暮らしぶりにゆるやかにふれながら、
集まる人同士、親せきや家族のような距離感に近づいていくのでしょう。

あなたの家も、人とのつながりを育み、
保ち続けるための魅力的な集い場になり得ます。





にぎやかなお茶飲みの時間

荒浜出身者と地域皆の憩いのサロンを、新しく生まれたまちで

◎ちょっとお茶っこサロン（宮城県仙台市若林区）

ポイント

- お茶飲みやいろいろな催しを通じ、荒浜出身者が、旧交を温め、近況を持ち寄り、気持ちを分かち合う
- 足の運びやすさ、リラックスした雰囲気、自宅ならではの長所。地域内外の誰もが集えて、新たな関係もここで育まれている
- 地域住民の運営委員が主体的に運営を担う。町内会長や市社協、行政なども活動をサポートしている

宮城県仙台市若林区。

防災集団移転団地や転居者の戸建て住宅、災害公営住宅などが整備されている荒井西土地地区画整理事業地がある。同地は、愛称だった「なないろの里」へと、今年6月に町名変更された。

なないろの里（旧・荒井西）で、自宅を開放したサロンが3年前から開催されている。荒浜から防災集団移転した庄子千枝子さんは、月一回「ちょっとお茶っこサロン」として、自宅を地域に開く。サロンは、津波で被災して離ればなれになった荒浜出身者が旧交を温める場になっている。さらに、「誰もが集える場所にしたい」（庄子さん）と、荒浜出身以外でも地域内外から人が集まり、お茶飲みや催しを通じて、親交を深めている。

「ひとりではできなかった」

同サロンを取材した。

この日の参加者は、約20人。玄関脇の受付で、参加費1000円を払い、

記名する。

「吉永小百合って書いていいですか?」「いいですよ。好きに書いてください」など、楽しげなやりとりが交わされている。

一方、台所では、漬けものを切ったり、皿に盛りつけたりと、テキパキと動き回る人たちの姿。運営委員が、お茶と軽食の支度を整えているのだ。

「ひとりではできなかった。私は恵まれている」と庄子さんが話すように、多くの人が力をあわせてサロンをつくりあげている。地域住民6人による運営委員が、受付やお茶出しなどの準備・運営に携わる。仙台市社会福祉協議会若林区事務所や仙台市若林区役所家庭健康課が、健康体操や講話などの企画・調整に助力している。

午後1時30分。開始時刻を迎えた。まず、運営委員の繁野みどりさんの進行で、軽体操を皆で行う。健康的に身体を動かし、笑顔が生まれる。「皆でやるとパバツとできました。皆でやると楽しい

ちょっとお茶っこサロン

庄子千枝子さん

「皆さんが楽しんで、ありがとう
言ってくれるのが、一番の楽しみ」

「んです」と繁野さん。
続いて、出雲栄子さんを迎えてのマジックショー。手品を60の手習いで始めた出雲さんは、各地のボランティア公演で腕を磨き、20年超えの芸歴を誇る。

「ティッシュをうどんに変えます」。ティッシュを細かく千切り、両手で包むと、うどんに早変わり。「本物ですよ」ツルツルと実食。「あれーなんでー」感嘆の声。次々に繰り出される鮮やかな手際に引き込まれていく参加者たち。締めは、演芸の皿回し。ところが、久しぶりの芸とあって、一度は失敗してしまふ。それでも、「がんばれ」「大丈夫」と周囲の温かい声援を受けて、見事成功。「いつもより多くまわっています」。万雷の拍手がおこる。
それから、運営委員の若生彩さんのピアノ伴奏で、合唱。「若い頃を思い出しますね」と「知床旅情」や「四季の歌」などを歌う。特に、荒浜出身の人たちにとって、荒浜の情景を歌う「荒浜音頭」

は、思い入れの深い一曲だ。合唱のあとは、お茶飲み。テーブルを囲んで、思いおもひのひとときを過ごす。

参加者のよろこびの声

参加者の大学公子さんは、サロンの良さについて、「普段はお互い用事があってなかなか会えない友だちとも、ここで会える。うつぶんを晴らし、英気を養っている」と話す。畠山てる子さんは、「楽しく笑い合って、何時間でも話して。こういう場所って大事ですね。こうして人がいらっしやるのも、庄子さんのお人柄ですね。ひとりぼっちでないかとか、いろいろ考えてくださる」と感謝を述べる。「集会所よりも足を運びやすい」と自宅ならではの良さをあげる人もいた。ゆつくりくつろげる雰囲気も自宅だからこそだ。
荒井西町内会会長の早坂勝良さんも、顔を出している。「元気で、明るく、楽しく、同じひとときを過ごす。こうして、皆と



まわり、つながるのはいろいろな人たちの思い

気持ちをつかさひしひしと感じる。防災集団移転でこちらにきた人たちは、かつて住んでいたところは危険地帯になり住めない。なかには津波でご家族を亡くした方もいる。心沈めて表面に出さずに気持ちを分かち合える場になっていく」とサロンの意義を語る。

「何もしていなかったら、立ち直れなかった」。庄子さん自身も、サロンを開くことで、救われた思いがしていた。自宅を再建する時から強い願いがあった。大きくなくてもいい、皆で集まれる場所にした。そのために、通路を柱で遮らないなど配慮した設計をした。大和蒲町地域包括支援センターに相

談を持ちかけて、あと押しも受け、開催に至った。夫も直接ではないが、理解して協力してくれている。

「サロンは皆さんの支え合いで成り立っている。私本当に幸せ。皆さんに会うことが楽しみなんです。移り住んだこの土地で、新しい仲間と昔からの人たちが笑って暮らせるように」と、庄子さんは明るくにぎやかな未来に思いを馳せる。

午後2時30分。終了の時刻だ。参加者は名残惜しそうな様子も見せるが、運営委員から次回開催日の連絡を受けて、続きは次回の楽しみに、お開きになった。「どうぞお身体に注意されて、またここで会えることを願います」と繁野さんが締めくくった。庄子さんが一人ひとりに頭を下げて、玄関先まで見送る。

始まった頃厚い雲に覆われていた空は晴れ渡り、太陽が燦々と輝いていた。まるで、サロンの明るい笑い声が、雲を吹き飛ばしてしまったかのように。



笑顔があふれる、にぎやかなお茶飲み

集会所が使えなくても寄り合える

◎すみれ会（宮城県南三陸町）

ポイント

- 地域の集会所が使えなくなり、代わりに個人宅を活用して集まり続けている
- 震災で他地区の災害公営住宅に移り住んだ人も参加

宮城県南三陸町の大森地区は、集落のおよそ半分が東日本大震災の津波により被害を受けた。同地区に住む高齢女性で主に構成される「すみれ会」は、年数回、皆で温泉などに出かけたり、毎月、平日の午前中に会員の自宅に集まってお茶飲みをしたりしている。

会員は30人ほどいるが、よく集まる20人のうち、70歳代が2人で、多くは80歳以上。最高齢の90歳の会員も踊りを披露するほど元気があふれている。子どもなどと暮らしている会員もいるが、ほとんどが夫と死別していて、同会の活動は、地域の同世代で楽しみを共有する貴重な時間だ。

地区内外の住民が集う

自宅のリビングを開放し、お茶飲み会場として提供しているのは、佐々木宣子さん。平日の昼間、同居している家族は、仕事や学校のために外出している。参加者は、ダイニングテーブルと座卓を囲み、おしゃべりを楽しむ。ふだん

から会員間で、家を行き来してお茶飲みをすることもよくあるというが、この会がなければ、20人という大人数でどっと笑い声が湧き起こることはなかなかない。また、会員同士でそれぞれの家族や親せきのことも知っていて、近況なども話にあがるなど、つながりの深さも伺える。

家に集まってお茶飲みをするときの会費は毎回300円で、会計担当者が菓子などを用意するが、ほかの会員も、自慢の漬けものなどを持ち寄ったりしている。また、2018年度は、南三陸町社会福祉協議会とおして、赤い羽根住民ささえあい助成金を申請。10万円の助成を受けて、より親睦を深めるために地区外に出かけるための交通費などにあてている。

すみれ会には、隣の地区からも1人加わっている。その地区の老人クラブでは、会員がその人しかいないため、行事を行えない。その人が「大森地区の皆さんのおかげで楽しめている。感謝感激」と言うのと、



すみれ会

会長 小松明子さん

「震災で地区を離れた人も仲間だから、一緒にまざってもらいたい」

周りの会員も「参加してもらって、こっちはますます楽しい」と応える。また、ほかの地区にある災害公営住宅に移り住んだ会員たちも、車に乗り合わせて参加している。地区をまたいで一緒に集まれることを皆がよろこび、会話も一層盛りあがっている。

佐々木さんは「いま大森地区に住んでいる人ばかりでなく、間口を広くして、いろんな人に参加してもらいたい。震災からいろいろあつたけど、わいわいと楽しい」「近所づきあいはたいへんだとよく言うけれど、それ以上に皆の明るい顔が見られてうれしい」と話す。

震災後のつながり維持に

もともと、同地区内で高齢者同士の交流を促進するのは、老人クラブの役割だった。地域のゴミ拾いや集会所で輪投げなどのレクリエーション、運動会を開催したり、町の高齢者芸能祭に出場してきた。老人クラブの会員で、活動の準備など、



最高齢90歳の会員が踊りを披露

手伝いをするメンバーたちのことをすみれ会と呼んでいたが、いまでは、同地区の老人クラブのすべての会員がすみれ会に所属。顔ぶれは全く同じだが、老人クラブとしても、皆で出かけるなどの活動を並行して続けている。

同会が個人宅でお茶飲みをするようになった大きなきっかけは、震災だった。地域の行事などで利用していた集会所が、津波によって使えなくなっ

てしまい、それまでのように大勢で寄り合いを開くこともできなくなってしまう。しかし、震災から1年が経った頃、当時のすみれ会の会長で、地域のリーダーのような

存在だった星みよ子さんが、定期的なお茶飲みの集い場として自宅を開放することにした。星さん宅の茶の間と座敷に分かれてテーブルを囲み、いろいろな話に花を咲かせた。会員も「分かれて座つていても、おもしろかったよね」と、当手を振り返る。

「いつも先駆けて地域の皆のために何かを働きかけた、動いてくれていた」「彼女には皆がついて行く」と言われるほど信頼されていた星さんだったが、昨年5月に亡くなったが、佐々木さんの家に集い場が移った。星さんから、「皆で集まること、たがたが」という思いを耳にしていた佐々木さんは、「広くはないけど、自分の家でよければ使ってほしい」と、快く自宅に会員を招いている。

会長の小松明子さんも、「長年メンバーを引っ張ってくれていた星さんの代わりを努めるのはたいへん」と話すが、佐々木さんやほかの会員ともときおり相談しながら、活動の企画などを進めている。



なじみの歌で声を合わせることも

震災が発生した日も、高齢者芸能祭に参加していたり、ご近所同士でお茶飲みをしていたり、一緒に過ごしていた会員たち。震災以前から交流と思い出を積み重ね、楽しいことも悲しいことも分かち合いながら歩んできて、いまの元気な生活につながっている。集会所が再建されれば、芸能祭に向けて、またそこで踊りの練習などに励んでいく予定だ。

活動のために利用していた公共施設が使えなくなっても、住む家が離れてしまっても、集まり続ける。災害に負けない住民間のつながりが見えた。清



自分たちで盛りつけた彩り鮮やかな食事を前に、「いただきます」。食卓を囲む。この日のメニューはグリーンピースのバターライス、高野豆腐と鳥胸肉の唐揚げ、筍とにんじんの煮もの、胡瓜と茄子の漬けもの、苺ジャムのヨーグルトだ

地域は家族、新しい大家族のカタチ

◎友の会（宮城県美里町）

ポイント

- 「食」が輪をつなぐ。一人ひとりが役割をもって、「自分たち」の会をつくっている
- お茶飲みのなかで、同じ地域で同じ時代を過ごした体験と思いを共有することで、元気の源になる。外出のきっかけづくりや健康維持、情報交換にも役立つ
- 近所づきあいが希薄な時代だからこそ、現代版の大家族として、地域のつながりを大事にしている

「にぎやかに食卓を囲みたい」

美里町の住民の千葉美知代さんは、1年前から近所の人たちを自宅（戸建て住宅）に招いて、お茶っこ会を開いている。月1回、80歳代から90歳代の女性10人が参加。午前10時頃から合唱や健康体操、折り紙などを楽しんだのち、千葉さんお手製の昼食を皆で盛りつけ、味わう。そのあとも、午後2時頃までお茶飲み話に花を咲かせる。この集まりを「友の会」という。

千葉さんは、かつて7人家族だった。それが、子どもが巣立って、両親や夫を亡くし、3年前からひとり暮らしになった。「いまは孤独を楽しんでいます、さびしいと思うのが食事の時。誰かと一緒に食べたいなあって」。そこから、同じ心境の人が自分以外にもいるのではと思いを巡らした。独居世帯や家族と同居しているも日中はひとりの人だ。老人会に参加した時に、近所に住む人たちに「うちに来て食事しない？」と声をかけ、友の会がつくられた。

手料理でもてなす。料理好きでも孤食だと間に合わせになりがちだったが、いまは「おいしいと食べてもらえてうれしい」とつくりがいを感じている。気兼ねなく参加できるようにと、「心づけとして」300円を各自が自主的に負担する。

先日は、「若い頃に水汲みで苦労した経験」や「姉妹の何番目で育ったか」の話題で盛りあがった。千葉さんは五木寛之氏の著書に言及してこう語る。「これまで高い山を登ってきた。これからは気張らず、ゆるやかに、『下山の思想』でいきたい。見あげると思い出がいっぱい。当時の思いを皆と共有して元気をもらっている」。同じ地域で同じ時代を過ごしてきたから分かち合えることがある。

参加者は会の醍醐味をこう口にする。「距離が近くて皆の表情がわかるし、会話も弾む」「ためになる話が聞ける」「毎月の楽しみ。外出のきっかけ」「昔のような大家族感を味わえる、たいせつな時間」。最高齢の参加者が、「来なきや損。健康の秘訣」と話して、周囲が「私



「お茶っご会だよ！全員集合！！(略)」の様子。壇上左から二人目が千葉さん

たちの目標。いつまでも元気に長生きして」とエールを送る場面も見られた。地区担当の民生・児童委員も「お手伝いさせて」と、食事の片づけや体操用の玄米ダンベルの提供などで協力。「集まってお話しだけで、おいしい料理をいたさない」と語る。

ひとりの思いが 地域に共鳴する

このささやかな住民の集まりを、美里町社会福祉協議会も見守っている。町社協の生活支援コーディネーターの高橋ゆかりさんは、参加者も自然に役割を担っている点に

着目。「食事の盛りつけもそうですし、各自DIYサービスなどで覚えた体操や脳トレを披露して活動を行っている。皆が役割をもって参加されているところが素敵だと思います」。

今年3月には、町社協からの推薦で、美里町生活支援体制整備協議会の啓発事業「『お茶っご会だよ！全員集合！！』わたしの地域の支え合い活動」に千葉さんたちは登壇した。これは、町内のお茶っご会の代表者が町内外の住民に活動の内容と工夫を伝え、「人が集い、語り合うなかで生まれる地域の宝」を共有する会だ。発表を聞いた町の住民は、「自分自身の人生を仲間とともに生きている」「同年代との交流が一番楽しいのでは。料理もすごい。理想的な豊かな人生だね」「時には、家族のように気兼ねせず、本音を言える場となっている」「現代版の大家族のカタチだと感じた」と会の魅力、そして地域支え合いのすばらしさに惹かれていた。

東海大学 健康学部 健康マネジメント学科 助教

竹内 友章 (たけうち・ともあき)さん

1989年生まれ。関西学院大人間福祉学部実習助手を経て2018年より現職。専門は地域福祉、社会起業。著書に『社会起業を学ぶ 社会を変革する仕事』（共著、関西学院大学出版会、2018）、『持続可能な地域福祉のデザイン 循環型地域社会の創造』（共著、ミネルヴァ書房、2016）などがある。



専門家に聞く地域づくりのヒント

“選択縁時代”の つながりづくり 私的空間を公共空間へ

特集テーマである「わたしの家をみんなの集い場に」には、集い場としての“居場所”、と自宅を開放する“住み開き”という2つの要素が含まれている。居場所の重要性はこれまでも多く指摘されているが、“自宅を開放する”という発想に新しいコミュニティづくりへの示唆がある。それらを3つの事例から考えてみたい。

3つの事例から見える居場所の機能

核家族や、都市化、また流動的な社会形態によって伝統的な血縁や地縁による「つながり」の希薄化が多く指摘されているが、「子ども食堂」に代表されるように“居場所づくり”の地域福祉実践が注目されている。地域福祉実践としての居場所は“間口の広い誰でも参加ができる”ユニバーサルな場所であることが重要なポイントとなる。今回、特集で扱われている3つの事例も「誰もが集える場所」を目指して活動をしているところに共通点がある。

さらに、3つの事例を掘り下げてみると、居場所がもつ機能が見えてくる。1つ目の機能は“想いを共有できる場所”である。防災集団移転など新しい生活を迎える不安な気持ち、ひとり暮らしの寂しさなどを参加者同士で共感できる居場所となっている。2つ目の機能は、“活躍できる場所”である。居場所をつくる人、参加者に関係なく、自分の得意なことを披露したり、簡単なお手伝いをするなどそれぞれに活躍できる場面が用意されている。3つ目の機能は“拠点としての場所”である。他の地

区に移り住んだ人が戻ってこれる場所であり、新しい関係性が生まれ、生活をみんなで考えていく場所でもある。

伝統的で新鮮なコミュニティづくり

自宅を開放して居場所にするという地域資源には、“住み開き”という発想が含まれている。住み開きは、アーティストが、自宅の一部をギャラリーなどとして開放したことが始まりとされているが、自宅という「個人」の空間の一部を開放し、さまざまな人が集うパブリックスペースとして共有するという発想である。無縁社会と呼ばれる現代にあって、個人の空間と、パブリックな空間の境目が動くことで新しい地域資源を生まれるという可能性を見ることができる。とはいうものの、振り返ってみると日本には「縁側に集まりお茶を飲む」などの習慣があり、自宅の一部を地域交流の場として開放するということが自体は、珍しいものではない。核家族化が進み、個人のプライバシーを重視する生活スタイルへとシフトするなかで、こういった習慣は失われてきたが、「シェアハウス」への関心の高まりに代表されるように、空間の「共有」をとおしたコミュニティづくりが改めて注目されていると言える。

自宅を開放することは、“住まい”にコミュニケーションという新たな楽しみを求める活動ということが言える。“暮らしを共にする”ことから生まれる“つながり”を3つの事例は教えてくれるように思う。



まじわる！ 集団移転 & 災害公営住宅

第35回

ボランティアとの つながり生かした夏祭り

南中里一丁目復興住宅あすなる会
(宮城県石巻市)



夏祭りの出しものを楽しむ子どもたち

2018年7月21日(土)

に、宮城県石巻市の南中里二丁目復興住宅の駐車場で、夏祭りが行われた。主催は、同住宅入居者からなる「南中里二丁目復興住宅あすなる会」だ。午前10時から昼過ぎまで開催。同住宅内外の子どもから高齢者まで、幅広い参加があった。テントの下でお茶飲みをしながらおしゃべりしたり、ヨーヨー釣りをしてしたり、新幹線を模した特設の小型アトラクション

ンに乗ったり、多くの笑顔が見られた。

全48世帯が暮らす同住宅は、14年2月に入居が開始された。もともとは一般の賃貸用に建設されていた集合住宅だったが、仮設住宅入居者をより早く恒久的な住宅に移ってもらうために、同市が借りあげ、20年間の期限つきで災害公営住宅として貸し出されている。

入居者は、周辺地域の町内会「新中里親和会」に加入していて、独自の自治会はない。入居者は、親和会が定期的に地域の公民館で開く健康体操に参加するなどして、住宅内外の交流を深めてきた。

そして、入居者主体で交流の場を設けるためにつくられたのが、あすなる会だ。同住宅には集会所がなく、入居者が大勢で集える場が身近になかったため、代表の石川巖^{いわお}さんが、同市社会福祉協議会と相談。駐車場にテントを張ってお茶飲みを開くことにした。テントは、同社協を通じて申請した助成金で購入し、パイプ椅子などは同社協から借りた。お茶飲



一般の賃貸住宅の予定で建てられた、水色の災害公営住宅

みは、昨年度中に12回開催し、今年度は5回を予定している。

「集まる機会があれば、参加者が飲みものや菓子を持ち寄りたりしてくれる。みんなよい人で、気持ちがいい」と話す石川さん。今回の夏祭りについては、「みんな、被災していろいろあったけれど、子どもがよるこ

べば、大人もよろこぶから、子どものことを一番に考えて準備した」と語る。子どもに楽しんでもらうための催しを、石川さんが個人的につながりのある団体に用意してもらった。震災直後、ボランティアとして、避難所になっていた市立湊小学校の清掃や、周辺の個人宅の片付けなどをするなかで、石川さんと知り合い、

その後もやりとりを続けてきた人たちだ。

ヨーヨー釣りなどを設けた、同県加美町の小野田地区の青年会「小野田建郷青年会」の前会長、白田山卓^{はたやまたかし}さんは、「当時の思いも共有しているし、そのときの絆をたいせつにしたい。手伝いに来た私たちのために、石川さんたちが昼食を準備してくれていたりする優しさがうれしい」と語る。

新幹線型の乗りものを設置し、運転していた「ほらんでいあぐるーぷ栗の里中津川」は、岐阜県中津川市から訪れた任意団体で、代表の中尾健さんは、「7月の豪雨で岐阜県の地元も被害があったが、これまで自分たちがボランティアでかわってきた宮城県の人たちからも心配の連絡をもらってうれしかった。この住宅への引越しを手伝ってから4年間が過ぎていて、感慨深い」と話す。

震災直後に生まれた被災地域内外のつながりをたいせつにすることが、その時どきに、それぞれの地域において支えとなっている。清



生活支援のお礼に渡す、300円分のチケット

住民が支え合う生活支援 ⑤

結いの会・高森東（宮城県仙台市泉区）

見守り合い、集いながら、助け合う地域をつくる

5つの町内会からなる、宮城県仙台市泉区の高森東地区では、「結いの会・高森東」という住民団体が、「見守り」「居場所づくり」とあわせ、「助け合い」と称した有償の生活支援に取り組んでいる。

同会の活動は、高森東地区社会福祉協議会での話し合いをもとに地域の課題解決に努めるため、地域住民にアンケートをとったことがはじまり。住民の声に応え、生活支援を充実させるために、同地区社協・高森東連合町内と連携する形で、立ちあげられたのだ。306人の会員がいて、そのうち95人が、地域のために手伝いをする活動会員になっている。頼みごとのある人は、同会が町内ごとに配置した、

助け合い活動のコーディネーターに連絡する。手を貸してくれる活動会員に、コーディネートが依頼内容などを伝えておき、現場に向いてもらう。

同会では、1回30分間の活動に対して、300円の謝礼が基本。依頼者は、事前に同会事務局から購入しておいた300円分のチケットを、お世話になった活動会員へ渡し、活動会員は、そのチケットと引き換えに、事務局から現金300円を受け取る。

2017年度は、23人が計179件の活動を行った。制度上、介護ヘルパーには頼むことができない草取りなどの庭の手入れや、買い物などの代行、通院付き添いなどの要望が多いが、支援内容は限

定されていないが、困りごとができるたびに相談してもらおうようにしている。活動会員が「手伝いをする機会がなければ話せない人、人となりのわからない住民もいる」と話すように、住民同士が新たにつながるきっかけにもなっている。

別事業の見守り活動では、町内会、民生・児童委員、同地区社協のボランティアもくれんなどと、「見守りネットワーク」を構成。結いの会の活動会員が、週1回ほどの頻度で見守り希望者に電話をかける。家族が外出している日、介護サービスの利用がなくて自宅にいる日、誰にも会う予定がない日などに安否を確認し、必要に応じて、各連携団体

と情報共有をする。

居場所づくりの事業では、商業施設の一角に「結いカフェ」を開設。毎週月・金曜日の午前11時から午後3時まで、自由に入りしってお茶を飲みながら談笑するなど、親睦を深めていくことができる。

代表理事の傳野貞雄さんは、活動全体をとおして、「深く困っている人から、もっと遠慮なく頼ってもらえるようにしたい」と、今後の目標を語る。

●DATA

結いの会・高森東

2015年6月に設立。居場所づくり・見守り・助け合いの3分野を柱として活動。広報紙も高森東地区内に全戸配付。年会費1000円。結いカフェは、ショッピングガーデン・キャラウェイ1階（仙台市泉区高森東）。TEL 090-1068-4525

チラシなどを作成して地域への広報にも力を入れる



結いカフェに集えば、楽しい話やちょっとした不安ごともしっかりと分かち合える



ゴミ出しの代行は、毎回100円分のチケットを貼って玄関に用意してもらおう



DATA
マタギ倶楽部
〒028-1121
岩手県大槌町小槌26-11-2
TEL 0193-42-2399
<http://matagiclub.theshop.jp>
商品は、ホームページより注文可能



自然からの贈りものを生かしながら 地域を元気に

ライター：元持幸子

岩手県三陸沿岸部は、東日本大震災より大きな被害を受けたが、近年少しずつ豊かな漁場を取り戻している。その海を支えているのは、北上高地の山々だ。ミネラルを含む清流が流れ、天然の巨木、山菜類、動物たちも多く生息し、昔から山の恵みを糧とするマタギたちも暮らしていた。

森林の恵みを生かす仕事

「山にかかわりながら、何か生きがいを持った仕事をつくりたい」と、藤原勝志さん（65歳）は、退職を機に、山歩きの好きな知人らと「マタギ倶楽部」を2012年8月にスタートした。マタギ倶楽部は、山の委託管理と養蜂、マツタケの採取と販売を中心に山の恵みを生かした仕事づくりを行う現代版のマタギたちだ。

震災後は、農業や山関係の仕事も減少し、新たな仕事づくりが求められていた。中心メンバーは、山歩きの好きな沿岸市町村に住む農家や震災後の転職・退職者など30歳代から70歳代の

15人。代表の藤原さんは、森林管理の経験を活かし、採蜜場所の選定や山の管理を行う。さらに地元の小学生対象に、年に数回、養蜂や山の仕事を伝える体験授業を通じて、故郷への愛着を深め、自然とふれあってもらっている。

自然と向き合うよろこび

マタギ倶楽部の仕事は自然が相手だ。春から夏は、花を求めて蜂の巣箱を移動させながら蜜を採取していく。清流の渓谷に生息する栃の木、ケンポナシの蜂蜜は、三陸の豊かな森の特徴としてあげられている。天候に左右される花の開花や働き蜂の状態と、山の知識を合わせながらメンバーは山々を駆け回る。秋には、マツタケの採取が始まる。

「秋になると、マツタケの生えている様子が目に浮かんで、わくわくします」メンバーが口をそろえて話す。自然相手の不安定な仕事ではあるが、思わぬ自然からの贈りものとして、大収穫や山の絶景に遭遇。自然の

なかにいると気持ちが悪く落ちつくなど、得るものも多いという。

夢が膨らむ仕組みをつくる

蜂蜜やマツタケは、地元で販売もするが、多くは県外へ発送されている。わずかずつではあるが、収入も入ってくるようになった。震災後、産業復興支援を受け、パッケージやホームページなどを整備した。さらに、全国の震災支援ボランティアとのつながりや全国各地のイベントへ出店し、販路の広がりがみられてきた。

メンバーの上台明子さん（69歳）は、「年に一度、皆で全国の百名山に行くことを楽しみにしているんです」と、マタギ倶楽部の楽しさを語った。藤原さんは、年間を通じた仕事づくりを見据えて、「メンバーそれぞれが小さな夢を見られるように、そして山の恵みに還元していけるよう、自分たちも、山も元気にしていきたいですね」と、これからも膨らむ夢を語った。

どごでもサロン

第13回

自然なつながりと支え合いを生み出す



週に1度の「お掃除サロン」 燈伝山松前寺

福島県金山町横田

福島県金山町横田地区にある燈伝山松前寺は、500年あまり前に建立された曹洞宗の寺。古くから地域の信仰や文化の拠点として住民に親しまれ、現在も町内外に多くの檀家を抱える。毎週火曜の午前9時。新國イワ子さん（84歳）と浅井タカ子さん（78歳）が寺を訪れ、11時までの2時間、本堂や境内の掃除をする。新國さんは10年以上、浅井さんはもう20年近く続けている。掃除のあとは、住職の大西泰道さん（たいどう）を交え、お茶飲みを楽しむ。

かつて寺の掃除は、檀家が輪番で行っていたらしい。地域の人口減と高齢化が進み、担い手が少なくなつたのに伴い、先代住職の依頼を受けて掃除当番を固定化した。ちなみに同町は人口2102人、高齢化率は59.3%（7月1日時点）。無償奉仕だった掃除作業は、有償制になった。新國さんと浅井さんは、町社会福祉協議会が非営利で運営する「ゆうゆう人材センター」に登録。住職が二人を指名し、センターから派遣してもらう形を取る。

現在の時給は760円。募参シーズンには駐車場の草む

しりもあつてなかなかの重労働だが、二人は「お寺での仕事はちつともたいへんじゃない。逆に楽しみ」と口をそろえる。気さくな人柄の大西さんが、お茶やお菓子のほか、ときに手料理を振る舞ってくれる。その心遣いがうれしいという。

新國さんは、寺から2キロほど離れた場所にひとり暮らしで、視覚障害もある。そこで掃除の日には、浅井さんが車で送り迎えをしている。寺への行き帰りのついでに、郵便局や農協での用足しや、商店での買いものなどを済ませる。

仲のいい二人は、しばしば自宅でもお茶飲みをしている。それぞれ自家用の畑を持っていて、野菜を分け合ったりもする。

農作業や寺の掃除、それにお茶飲みなどの社交は、介護予防や認知症予防に相当役立っているに違いない。住職になる前、介護業界で働いていた大西さんも次のように指摘している。「この町は、住民同士のつながりが強く、高齢になつても畑や仕事を続ける人がほとんど。だから元気な人が多いのだろう」。

新國さんと浅井さんは、その典型。歴史ある寺の維持に貢献



しつつ、仲間や住職と楽しいひとときを過ごし、ちよつとした小遣い稼ぎにもなる。「お掃除サロン」が、元気の秘けつだ。木



運動とその合間のお茶飲みでふれあう

なかよしピンポンクラブ（宮城県石巻市）

東日本大震災のときには床上浸水の被害があったという、宮城県石巻市の開北地区。2017年5月から、毎週月曜日の午後、メンバーの交流をたいせつにしながら卓球をしているクラブがある。名前は、「なかよしピンポンクラブ」。会場は地域の集会所だが、部屋中央に卓球台を置くと、雰囲気も様変わりする。

メンバーは、男性4人と女性5人の計9人で、これまであまり卓球をしたことがなかった人も多い。シングルスやダブルスの試合をまじえ、皆集中してラケットを振るが、重要なのは勝ち負けではない。誰かが上手に得点したときに盛りあがるのは当然だが、誰かがミスしても、「惜しいね」と一緒に悔しがりながら、和気あいあいと過ごす。そして、なんとと言っても、皆のお楽しみは休憩を兼ねたお茶飲み。部屋の端のテーブルを囲んで腰を下ろし、ラケットはマグカップに持ち替える。コーヒーやお茶とともに、菓子や漬物ものなども味わいながら、冗談と笑い声が行き交う。幼い頃や青春時代の思い出、世間や

地域の情報など、話題もさまざまだ。

もともと、代表の佐藤義美さん、とし子さん夫妻は、別のまちから同市に引っ越してきて、健康維持のための運動と、地域のひととの交流の機会を求めていた。既存の卓球クラブに加入しようとしたが、人数が多すぎたため、自ら新しいクラブを設立し、こうして、一緒に楽しみを分かち合える仲間を得た。

メンバーは皆、このクラブの活動時間のほかには、ご近所などとお茶飲みをする機会もないため、週1回のこの集まりが待ち遠しい。ほとんどが集会所まで車で5分程度の距離に住んでいるが、なかには隣の東松島市から通う人もいる。同クラブではじめて知り合った仲だが、買いものなどに出かけてまちで会えば挨拶を交わす。

同クラブは、メンバーのたいせつな居場所となっていて、体調を崩し、治療のために入退院を繰り返している義美さんも、退院中は顔を出す。メンバーは、「佐藤さんがいなきや困るから、早く元気になって戻ってきてほしい」と話し、義美さん



も「とにかく、このクラブがなくならないように、皆で頑張っていきたい」と意気込む。清

過疎地で暮らしを彩る住民自治 (後編)



レストランでは、特産の柚子を使った
六次化商品も販売



川根振興協議会（広島県安芸高田市）



過疎のすすむ広島県安芸高田市の川根地区では、集中豪雨の被害を受けた1972年、住民自治組織「川根振興協議会」を発足させた。陸の孤島と化した集落で、住民同士が助け合った経験は、住民参加の組織づくりにつながった。以降、行政頼りにしない、攻めのまちづくりを展開している。1993年、世帯ごとに通年で1日1円を募金し始め、それを原資に高齢者への配食やサロン活動を行う。1999年、入居者が自分の好みで間取りを設計し20年経過すれば土地・建物を入居者が保有できる公営住宅「お好み住宅」を行政に提案・実施、若者の定住促進に取り組み。2000年、農協が撤退したガソリンスタンドと商店を、地域住民で運営継続する。2003年、高齢者のデイサービスを誘致して、サテライトデイを行う。2009年生活の移動手段として、市町村運

営有償運送事業「かわねもやい便」を始める。また、特産の柚子を使った六次化商品を開発し、広島市内でも取り扱われるほどの規模に成長。全国からの視察を受け入れる地域となった。

要求型から提案型へ

現在に至る活動の基礎となったのが、1991年に住民で作成した「川根夢ロマン宣言」だ。川根中学校の統廃合と廃校跡地の活用法についての議論を契機に、住民自らが集落点検を行い、各集落の自慢や良いところを出し合っ、具体的な地域目標を立てた。行政に「要求」するのではなく、「提案」するまちづくりを明確に打ち出したのだ。

中学校跡地には、川根地区全体を、環境の博物館とする交流拠点施設「エコミュージアム川根」を翌年開設し、ピーク時には年間4千人以上が利用。また、地域の道路改良では、ど

ういう道路をつくるかという計画や用地交渉までを住民が担うことで、住民の本来の思いが行政施策に反映され、地域を守ることにつながった。

このような川根地区の取り組みは、合併後の安芸高田市に引き継がれ、全市に地域振興協議会が組織化された。

**地域への誇りと
役割が原動力**

高齢化などにより個人や集落だけで農地を管理することが難しい過疎地において、農地保全活動は大きな課題だ。川根地区では10年かけてすべての農地で取り組んだ。「川根の農地を自分たちで整備することは、地域への誇りになる」と24年間会長を務める辻駒健二さんは語る。

現在、エコミュージアム川根を、介護拠点にリニューアルする構想が持ち上がっている。また、小学校の統廃合の話もすすむが、「地域づ

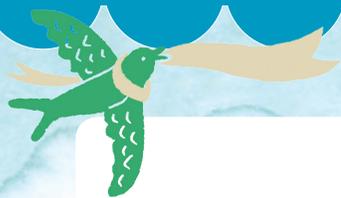
くりありきで考えたい。統合される小学校は、自然豊かな環境で学びたい子や、都会の学校になじめない子どもたちも通える学校になれば」と思いは膨らむ。

「まちづくりの本質は、地域の人が生かされ合っているという実感をもつこと。あんなところと言われても、自分たちには最高の地域。家族同様に親身になってくれる人ばかり。地域への誇りと一人ひとりの役割が、まちづくりの原動力になる」（辻駒さん）。



レストランが併設された「エコミュージアム川根」

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

老いたワーカーからの遺言(その5)

週末土曜の朝の目覚めに、「チョコちゃんに叱られる(NHK 総合)」を観ています。日々ときめかないで1年がアッという間に通り過ぎていく私。『ポーッと生きてんじゃねーよ』と5歳の女の子に叱られる時間です。金曜の夜に放映している番組で、金曜は夜遊びが多いため見逃してしまう。だから、土曜朝の再放送で観る。「二日酔いが飛んでしまう」ので、同世代の諸兄、是非ご覧あれ。

チョコちゃんに言わせると、ポーッと生き始めるのは19歳くらいからで、年を重ねるごとに時間の経つのが早まるよう。ときめかないと呆けるということかもしれない。けど、若い(何歳までかは言いません。うちのスタッフに叱られる!)きれいな女性に、日々ときめいていますよ。隣の浜上さんの口癖、「君、かわいいね!」までは言わないが…。

縦社会の組織、福祉業界ほど、古臭くて男性上位の社会はない。圧倒的に女性の多い職場なのだが、「ポーッと」生きている連中の多くは、縦社会での出世競争に没頭し、疲弊し、ワーカーとしての自己実現の意味を見出せなかったわれわれ「男」。故に、貴女(誰?)のように素敵なワーカーに目が向くのです。

中途半端なヒューマニズム、一方で江戸時代より封建的と思える縦社会で、寛容と忍耐、調和をもって、納得できないことでも「村度」を働かせる必要に囚われる傾向にある組織人(=男性)の皆さん、チョコちゃんに叱られることで、少しは覚醒してみませんか!

『住民自らが地域課題を把握し解決を試みる取り組み』を唱えているけど、『じゃ、自分の組織の持つ課題に自らが解決する取り組みをできないのはどうして?』とチョコちゃんに質問されたら、皆さんは?

「本人の最善の利益」と「意思決定」の使い分け、その違いは? 自立支援介護というけれど、自律と自立の違いは? 施設で身元保証人が必要なのは、本人の権利擁護のため、それとも施設の都合からか、どっち?

「ポーッと生きてんじゃねーよ」、また叱られた(叱られたのは、勿論…?)。

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上章



大事にしているもの、信念、頑固者!

ある人から『浜上さんほど頑固な人は知らない』と言われたことがある。あまり良い気持ちはしなかった。自分ではそうは思っていないので、でも、さらにほかの人からも『浜上さん、自己覚知をしないと〜』とも言われ『そうかな?』自分では結構、柔軟性があると思っているのだが・・・他者からの見方は自分と違うみたい。そういえば過去の職場で尊敬する上司から、『浜上君は頑固や』と言われたことを思い出す。私から見ると私に頑固だと言っているその人たちも相当頑固な人たちだと思うのだが・・・。

仕事に対して、生きることに何をして大事にしているか? 強くこだわっているか? 福祉の仕事に携わっている人のなかで心から尊敬する人たちがいる。地域福祉の推進に人間が目指す最高の理想、夢を信じて発信し続けた先輩がいた。『地域福祉はロマンだ!』と。重度の障がいをもった、同じ町に住む女性から社協活動の何たるかを学び、当事者発のさまざまな事業を開拓した先輩がいた。『地域福祉は愛だ!』と。弱い立場の人、生きづらさを抱えた人に対し、徹底した優しさをもって守り支える人がいる。口癖の『めんどくせ〜』は、斜に構えるご仁の照れ隠し。支援の対象となる人、団体、組織に対して、投げ出したいような困難にも決して諦めない人がいる。『私は信じる』と。

敬愛する人たちに共通することがある。人を信じ、大事にする。弱い立場にある人への共感と慈愛がある。私利私欲から離れている。目指す理想像をもつ。冷めることのない情熱。それぞれのこれまで育った家庭環境や生きてきた経験、実践をとおして培ってきた信念が根底にある。それは他者から何と言われようと大事にしていること。譲れないもの。身につけているもの。そうしたものを“頑固”と言われるのであれば結構ではないか。それぞれが信じるものを大事にして、被災者、被災地の支援に、仕事や地域活動に携わってほしい。いまは、ただ敬愛する一人の“頑固者”の健康回復と復帰を心から願いながら・・・。

平成 30 年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<ステップアップ研修>

【仙台会場】 9月5日(水) 仙台市戦災復興記念館

講師: 永坂 美晴(兵庫県明石市社会福祉協議会 地域総合支援センター 地域支え合い推進担当係長)

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601



ぎんの星で。70年代フォークソングやJ-POP、アニソン、オリジナル曲などを演奏

62回目

市民リレー

東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

20歳代から70歳代の多世代バンドが活躍

◎タイムスリップと仲間たち（宮城県石巻市）



8月4日、東松島市の障害者
日中活動支援施設「ぎんの星」
で、「第二土曜のいち」が開かれた。
特産品を扱う屋台の出展者にと
もに、祭りに花を添えたのが、バ
ンド「タイムスリップと仲間たち」
だ。往年の名曲のカバーや、「いい
湯だな」のメロディに乗せて「ぎ
んの星いいところ」と歌うテーマソ
ングを披露。曲名当てクイズでも
利用者と来場者を盛りあげた。
終了後、利用者は「すごくよかつ
た」と笑顔で語った。
タイムスリップと仲間たちは、
石巻市を拠点に活動するバンド
だ。現在のメンバーは9人。20
歳代から70歳代までと幅広い年
齢で構成される（かつては80歳
代も在籍）。
月に十数回、高齢者施設や
障害者施設で慰問演奏をし、サ
ン・ファン祭りなどのイベントに
も出演する。仕事が休みで集ま
れる人で毎回編成。個人で練習
し、全体であわせるのは当日のリ
ハーサルと、即興演奏に近い。「う
まくなくてもいい。皆で楽しも
う。自分たちが楽しまないと来
た人も楽しめない」と、代表の
櫻井光三さん（61歳）は話す。
バンドの母体は、櫻井さんが
同級生と組んでいたユニットだ。
櫻井さんの母親が利用するデイ
サービスで慰問演奏したのを皮切
りに、各地の事業所を回っている。

震災後に、櫻井さんは石
巻市大街道北でギターショップ
「TIMESLIP」を始め
た。店を入口に、演奏仲間の輪
は広がっている。
敬愛する長瀬剛の曲を弾き
語りする女性は、職場近くに
店があったことで、「挫折したギ
ターに挑戦したい」と立ち寄っ
た。そこからバンドに参加。「自
分に自信がもてるようになった」
と目を輝かせる。
昨年末に加入した男性は、「お
酒にかわる楽しみとして」店でエ
レキベースを購入。「せっかく買っ
た縁だから教えてあげる」と櫻
井さんに誘われて、ステージに
も立つ。「ひとりですべていたら、
悶々と自己満足で終わっていた。
舞台上に引きあげてもらって、土
壇場の対応力がついたし、技術
もあがった」と手応えを語る。
演奏会後には、ファミリース
トランなどで打ちあげをする。
日頃からFacebookで連
絡を取り合い、櫻井さんの店で
鍋を囲むこともある。
年齢や境遇、障害を越えて
。音楽は人をつなぐ。田

DATA

宮城県石巻市 大街道北
1-4-14
(TIMESLIP)
連絡先：090-2980-5901

☆次号予告 特集「生活支援」

平成30年度 地域福祉コーディネート研修事業

<地域支え合い活動実践研修2

お宝の発見から発表会の開催の方法を学ぶ

～第1回 お宝探しの方法と住民研修開催の手順など講義・演習～>

【塩竈会場】 9月7日（金） 塩釜ガス体育館

講師：高橋 誠一（東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授）

志水 田鶴子（仙台白百合女子大学 人間学部 准教授）

購読者を募集しています！

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか？

購読会員 年3,696円（年12回、送料込み）

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先

●ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：02260-9-46303

加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、

①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み
を記入してください。

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ（地域づくり）から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

70号の特集記事を読んで、仙台市にたくさんの路上生活者がいるということに少し驚きました。たまに仙台市へ出かけることがあります。そのような状況や、支援に取り組む団体のことは知る機会がありませんでした。（新潟県N・S）

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737

E-mail joho@clc-japan.com

編集後記

特集記事でご紹介した、すみれ会の皆さんの満面の笑みを表紙に使わせていただきました。取材時には、私も顔の筋肉が痛みだすくらい大笑いさせていただいて、元気を分けていただきました。（清野）